

## 宮沢賢治『蜘蛛となめくちと狸』

片野修

この作品は不思議な物語である。宮沢賢治といえば、『注文の多い料理店』から連想されるように、人間と動物が関係する話では、つねに人間が悪者として描かれている。しかし、『蜘蛛となめくちと狸』に人間は登場しない。代わりに主人公になるのは、「蜘蛛と銀色のなめくちと顔を洗ったことのない狸」であり、いずれもみんな立派な選手だったと紹介されている。けれども、いったい何の選手だったのか、私はよく知りませんとあるが、この答は最後に明らかになる。

あらすじは以下の通りである。

ある晩、腹ペコの赤い手長の蜘蛛が風に飛ばされてきました。蜘蛛はやっとの思いで網をしかけ、はじめに蚊を、次にかげろふを捕まえます。かげろふは命乞いをしますが、蜘蛛は無慈悲に食べてしまいます。やがて女の蜘蛛があらわれ、夫婦は二百疋もの子をつくりました。下の方では、銀色のなめくちや顔を洗ったことのない狸が嫉んで、蜘蛛をぶじよくします。やがて、蜘蛛の子は蟻に連れていかれたり、行方不明になったり、赤痢にかかったりして百九十八疋まで死んでしまいます。残った夫婦と子供も食物がたまって腐敗し、雨に流されてしまいました。

蜘蛛に馬鹿にされていたなめくちは、親切だという評判でしたが、かたつむりと相撲をとろうと言ってだまして、食べてしまいます。次に、なめくちは、へびに噛まれて傷ついたとかげを直してあげると騙して、なめて溶かし、食べてしまいます。その結果、体が大きくなったなめくちのところに雨蛙がやってきます。蛙はなめくちに相撲をとろうと言い、しめたと思ったなめくちは蛙を投げ飛ばしますが、蛙はなめくちに塩をかけ、弱ったなめくちは食べられてしまいました。

狸はお腹をすかしているときに、やはりひもじくて死にそうな兎と出会います。狸は山猫大明神さまのおぼしめしだと言って、念猫をとなえ、みんな往生できるとだまして、兎を食べてしまいます。次に狼がお米をもって、狸に説教をしてほしいと訪れます。狸はなまねこ、なまねこと唱えながら、狼も食べてしまいます。ところが、狸のからだの中に泥や水がたまって、無暗にふくれる病気になり、最後は熱にうかされて死んでしまいました。蜘蛛もなめくちも狸も、地獄行きのマラソン競争をしていたのです。

宮沢賢治の小説の中で、動物が登場する話としては、セロ弾きのゴーシュ、やまなし、雪渡りなどがよく知られ、いずれも心温まる展開が読者の心を惹きつけている。それに対して、本作品は「悪い動物」が登場する点で異色である。しかし、悪い動物が描かれる作品はほかにもあり、それが賢治作品の世界を拓けていることは指摘しておきたい。

本作品の蜘蛛もなめくちも狸も、他の動物を騙して食べてしまう。とくに狸は念仏ならぬ

念猫を唱えつつ騙す点で、人間の宗教を想起させるが、そういう寓話的要素に加えて、動物生態学的に興味深いのは蜘蛛の話である。ここでは、飢え死にしそうな蜘蛛がようやく蚊を一疋捕まえるところから、やがて太り、妻を迎え、二百疋もの子をもつようになる。子孫を飛躍的に増やすところは、現在の視点からすると、繁殖成功をなしとげたかに見える。しかし、その子らは結局ほとんど死んでしまい、夫婦と二疋の子だけが残される。

個体群生態学の教科書を読んでいるような展開であるが、当時はまだ生態学は普及していなかった。しかし、賢治はすでに翻訳されていたダーウィンの『種の起源』を読んでいたと思われ、そこで個体群の変動について学んでいたのかもしれない。注目すべきは、残った夫婦と二疋の子供も「地獄に行ってしまった」ことである。奢れるものは久しからずということであろうか。

賢治の作品には、適者が生存するといった概念は見当たらない。資本主義や軍国主義はその思想的拠り所をダーウィンの進化論に置いていた兆しが認められる。競争によって勝ち残ることが重要であり、勝ち残ったものが世の中を支配していく。その結果が大企業であり、大東亜共栄圏であった。一方、賢治の作品では悪者が勝ち残りそうになると、しっぺがえしを受けて滅んでしまう。

嘘つきや奢れるもの、欲の深いものに賢治は厳しい。なめくぢも狸も嘘をつき欲が深いゆえに地獄に行くことになる。賢治が生きた時代は、資本主義と軍国主義が人々の生活を支配するようになり、それに反発する社会主義運動や労働組合活動は抑圧されていく。その後、太平洋戦争を経て日本は民主主義国家に生まれ変わったが、嘘、奢り、強欲は現代社会のいたるところに蔓延している。大国による覇権主義は世界各地で猛威をふるっている。この作品で賢治が言いたかったことは、現在でも大きな意味をもっており、社会体制にかかわらず人間の本質にせまるものである。

賢治はこの作品を 1918 年の 8 月、22 歳のときに執筆した。盛岡高等農林学校を卒業して、研究生だった頃である。おそらく、賢治にとってもっとも初期の作品であることに驚かされるが、25 歳までに「注文の多い料理店」「雪渡り」「どんぐりと山猫」「かしはばやしの夜」など多くの秀作を残している。もちろん、世間にはほとんど知られていなかった。賢治が天才だと言われるのも、もっともである。